Osaka Gakuin University Repository

Title	『松原正全集　第三巻　戦争は無くならない』（圭書房、平成二十九年二月） Matsubara Tadashi, *The Collected Works of Tadashi Matsubara, Vol.3: Wars Will Always Break Out*, ed., Haruo Rusu, et al.
Author(s)	平松　良康 (Kazuyasu Hiramatsu)
Citation	大阪学院大学　外国語論集（OSAKA GAKUIN UNIVERSITY FOREIGN LINGUISTIC AND LITERARY STUDIES）, 第 72 号：31-41
Issue Date	2016.12.30
Resource Type	Book Review/ 書評
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

大阪学院大学 外国語論集
第72号　2016年12月

『松原正全集　第三巻　戦争は無くならない』（圭書房、平成二十九年二月）

平　松　良　康

昨年六月に他界された松原正氏の全集第三巻が、満を持して圭書房より刊行せられた。真に文学を愛し書物を好む読書人には、その質・量の圧倒的な充実は無論のこと、装丁・造本に至るまで細心の目配りが行き届き、まことに悦ばしい。誠実な本物の学者に相応しい凛とした見事な書冊である。

『第一巻　この世が舞台』が『人間通になる読書術』を基に編まれた、眼光紙背に徹る奇才の名著案内であり、『第二巻　文学と政治主義』が我が国の作家や恩師福田恆存に関する評論と、保守派のミニコミ誌『月曜評論』の連載時評とをまとめた特異な文化論であり、いよいよ第三巻は著者渾身の力作戦争論なのだが、「現象論のみに終始して本質論を回避する」、「『道義不在の防衛論』ばかりが横行する」愚者の楽園・日本に於いて、西洋精神との如何ともなし難い隔絶を承知の上で苦闘し続け、あるべき人間とあるがままの人間、理想と現実との両極の間を往来通行せんとした著者の真剣勝負の知的誠実が、どの巻のどの頁を開いても、気迫に満ちた端整な文章を通してひしひしと感じ取れる。

至極厄介なテーマを縦横に論じながら、その文章のリズムは飽くまで美しく心地良い。「文章に関する『不感症、無関心』はそのまま道徳に関する『不感症、無関心』だ」と堅く信ずる著者は、読者を楽しませつつ啓蒙する文章の工夫を凝らし、たびたび読者のために言葉遊びや息抜きを周到に用意したから、この六百頁近い大著も存外たやすく読み進める事が出来よう。著者の技量があるから読み易いけれども、読み流してはなるまい。簡単に解る類の主題ではないからである。安直な解決を拒絶する古くて新しい難問だからだが、時流を論

じて常に根本的な問題を深考する著者の論述が旧説と化する事はなく、それ故、読者は再読三読するごとに熟考を尽して片付かない難問の難問たる道理に改めて気付かされ、その理詰めの苦闘への感動を新たにする事になる。政治評論にも第一級の文学作品の美を求めたオーウェルの様に、著者は緻密かつ雄渾な、朗唱に値する滑脱流麗な文体を編み出した。T. S. エリオットと並んで彫心鏤骨のオーウェルは、松原氏が敬愛し学ばんとした道義的作家なのである。

文中に引用される多くの学者・評論家のその時逃れの空論・悪文は、往時は甘い読者をたぶらかせたとしても、読み返す価値は全く無い。（笑止千万にも、本物を気取る偽物は依然、死に学問の自己満足の、無くもがなの論文を書き散らし稼ぎまくるより他ないが。）それに比べて、直後にその文章の論理的欠陥を指摘する著者の辛辣な評言は、痛烈無比であり、棚卸しの名人芸を聴くかの如き趣がある。昨今つまらぬ言葉狩りの威勢に気おされて、悪口の表現の豊かさも技術も途絶えつつあるが、あくたもくたの応酬とて立派な国語の伝統の一部なのであり、半畳を入れる著者の絶妙な酷評は断じて区々たる揚げ足取りなどではない。最適な一語を選ぶ労を惜しめば、どんな大論文の堤も片言隻句の蟻の穴から崩壊するからだ。この点、本文中に言及される愛国心の定義でつとに有名な英国の文人ジョンソン博士が、隻語も漏らさず論敵を完膚無きまでに叩きのめす舌鋒の激しさ故に、その冷徹冷酷を指弾された事が想起されて興味深いのである。

「言挙げせぬ国」日本とは異なり、英国には社会主義者バーナード・ショーとカトリックのチェスタトンとの論戦に明らかな如く、議論の徹底とユーモアの余裕とが両立しうるまこと羨ましき文化がある。そのチェスタトンは、傾倒するジョンソン博士への非難に論駁して次の様に述べた。ジョンソンは劣れる論敵にも自分と同程度の知的誠実と真摯を期待したのだ、議論に負けるかも知れぬと覚悟の前で真剣勝負を常に挑み、事実勝利したから会話の暴君と呼ばれたのだ、威張りちらすと非難するより先に、この巨人の叡智のアクロバットを十分評価せよ、主張の押し付けや論理の帰結を嫌がるより先に、強制するに足

りる反論やそもそも論理を有する作家がどれだけあるか。倦む事なく何度も主張を説き続け、しかもその中身と意図の浅薄が全く暴露されない、そんな「鋼の如く強靭な頭脳」の持主がどこにあるか。「現代の我々の書物雑誌に氾濫する漫然とした多音節語を読むと、我々が知恵を見出したより寧ろ、才智すら喪失した事の方がいよいよ明白なのである」と。

現代日本にも通用するこの様な批評を読むと、松原氏は決してジョンソン博士の様にだらしなくも怠惰でもないけれども、英国文学最良の特徴である才智を体得し、その戦争論や時事評論に於いて存分に発揮されたのだと感服する。ただ鉄面皮な論敵は、心酔者のボズウェルの様に徹底的に論破される悔しさ、恥かしさを痛感する事もなく、また英米の知識人がオーウェルの誠実な内戦の記録を故意に黙殺した如く、松原氏の矢継ぎ早の批判に対して、普遍的な論理と日本語の表現（文法）と言葉の音楽（リズム）とに基づく三方からの一斉攻撃に怖気付き、けれども蛙の面に水で、知らぬ顔の半兵衛を決め込んだ訳である。

知的・道義的怠惰を曝して著者に批判された主な学者・評論家・作家を章別に順に列記する。第一章「人間は犬畜生ではない」。殿岡昭郎、臼井善隆、川上宗薫、大江健三郎、永井陽之助、野坂昭如、筑紫哲也、家永三郎、ジョウゼフ・ミーカー。程度の差こそあれ、モンテーニュやロレンスやトルストイの様に思考を徹底せず、愛他主義と自己愛との激越な真の葛藤も知らず、「臍下三寸を持合せぬかの如く」「男根不在」の綺麗事を公表したから松原氏に難詰された。この章では、動物と人間との比較照応、とりわけ人類学的に「縄張を防衛しようとしないゴリラ」と「本気で祖国を防衛しようとしない国民」の自堕落の類似が印象的である。次章「生存が至高の価値か」。永井陽之助、高橋康也、西川潤が俎上に載せられる。「生存そのものが『中核価値』なのではない」と断じたソクラテスの生き方が論じられ、道化師フォールスタッフと後に名君となる断固たるハル王子、曖昧主義のエラスムスの愚昧と信念を貫く『四季の男』トマス・モアの剛毅とが対比される。続いて「正義は相対的である」

の章。久野収、大江健三郎、「あたらしい憲法のはなし」の筆者に小田実。彼らには力と正義とに関するパスカルの真摯な思考など薬にするほども無く、正邪善悪を気にする人間性を無視した楽天主義と、そのくせ我にもあらず「してはならない」だの「許されない」だの「せねばならぬ」だのと口走る軽率とが顕著に認められて論難される。断るまでもなく、ジョウゼフ・ヘラーの小説『キャッチ二十二』に登場する百七歳の売春宿の亭主の如く、生存だけが後生大事なら、柄にもなくその様な絶対命令の言葉は断じて口にしてはならぬ筈だからである。

無論、敵身方思考を超えた松原氏は、進歩派ばかりを論破した訳ではない。保革の別無く、決して愚者に容赦はしない。次章「侵略戦争は悪事か」。高坂正堯、猪木正道、『月曜評論』の保守派知識人、粕谷一希を著者は手厳しく難じた。彼らが何の根拠も示さず議論を棚上げし、「正義なんぞは二の次三の次にして、長い物に巻かれたがる」、その情けない習性をえぐり出した。そして、極東国際軍事裁判やフォークランド紛争、さらにABCD包囲陣から明治にまで「先行的行動」をさかのぼり日本の困難な歴史に就いて概括し、「侵略戦争を明確に定義出来」ず、「侵略の何たるかを遂に知る事が出来ない」なら、「なぜ、悪事とも善事とも知れぬ侵略戦争を、人々は忌むべき悪事と断じて怪しまない」のか、率直な小林秀雄とは異なり、なぜ反省なぞするのか、と疑問を呈する。

次章「力が正義なのか」。プラトンの対話篇やトゥキディデスの「戦史」を引用し、「政治と道徳とは切離すべきもの」か否かを論じ、T. S. エリオットのマキャヴェリ論を語り、西洋の人間中心主義の報いたるアウシュビッツやスターリンの粛清、反対の立場のキリスト教十字軍の虐殺にも言及し、「正義のための流血」を是認するこの「厄介な生き物」の二律背反、宗教的・道徳的たらんとして残酷にならざるをえない「人間の運命」を力説する。

次に「善には悪が必要である」。悪に対する寛容・非寛容に就いて熟考したベルジャエフの思想が考察され、対照的に渡部昇一の評言に見られる「人間に

ついての無知」に根ざした「没道徳的白昼夢」が酷評される。森嶋通夫しかり、三好徹しかり、三島由紀夫も丸谷才一も長谷川三千子も同断である。なぜ我々は突きつめた極端な思考が不得手なのか。ドストエフスキーの様に「怯懦と怠惰を駆逐」する戦争の効用を説けず、ブレイクの様に「能動的な悪は受動的な善に優る」との「危険な真理」も語れず、ニイチェの様に「勇敢である事が善であり、弱さにもとづくものの一切が悪だ」と断定する事も、なぜ出来ないのか。それは永井荷風が見抜き嘆じた西洋の「熱情」が日本人に無いからである。アウグスティヌスの如く「謙虚たりえぬ事に激しく懊悩する」凄まじいプライド（傲慢）の欠如が原因なのだと評される。おのが高慢に苦しみ格闘し「懸命に隣人愛を説いたトルストイ」に関して同じく論じても、武者小路実篤の「植物的な」「無気力な綺麗事」とシェストフの「道徳に関する切実な問題」提起とでは、雲泥の差があるのである。

次いで「モラトリアム惚けの防衛論議」。内山秀夫、長谷川三千子、筑紫哲也、日高義樹、長谷川慶太郎、永井陽之助、片岡鉄哉、岡崎久彦。彼らの「現に今在るぐうたら」が論難され、E. M. シオラン、ドストエフスキー、ハンナ・アレント、オーウェルの知的誠実との対比が際立つ。それから「戦争、道徳、そして愛国心」の章。殺人に関して小室直樹とカミュとの、清水幾太郎とオーウェルとの決定的な道徳的相違が指摘され、大岡昇平の『俘虜記』の大嘘とオーウェルの体験記の誠実とが比較論究される。そして、オーウェルのナショナリズムと愛国心との定義と区別を紹介した後、松原氏はその明確な線引きの難しさを述べ、「人間である限り、党派心も愛国心もナショナリズムも、免れる事は出来ない」からそれを恥入る必要はないが、「それに気付かぬ事、それに溺れる事」は汚辱なのだと書いた。

最終章「『無魂洋才』の国」。ここで自己欺瞞の知的怠惰を追及されるのは、井沢弘、高坂正堯、勝田吉太郎、唐木順三、井上ひさし、粕谷一希、渡部昇一、森常治の面々である。その痩せ我慢の欠如、不真面目、不潔な処世術が、乃木希典、森鷗外、福澤諭吉、岡田資中将の真摯とパスカル、ドストエフ

スキーの本気と対照的に論評される。だが、それら没道徳な駄文なぞ消し飛ぶ程、松原氏の紹介する「ビアク島で戦死した無名の一将校」の文章は床しく胸を打ち、清澄な和魂に共鳴させる。この戦争論は、友人を斬る事から始まり知人を斬る事で終るが、どこか思想信条をめぐり友人・弟子とも絶交する吉田松陰の真摯な和魂をも連想させて、鮮烈かつ清浄な読後感を残す稀有な雄編である。現象としての戦争を題材とした人間の本質論、切ない日本対手強い西洋に関する心深い比較文化論、何よりも知識人軽侮を通して快刀乱麻を断つ、景仰の日本人論なのである。

精緻な一大述作の構成と概略をかいつまんで述べただけだが、この戦争論に登場する偉大な作家・詩人は皆、生命を賭して自己の思想信条に忠実に生きようとした。一方、著者に斬られた学者・評論家・作家は、多かれ少なかれ外来の抽象観念を笠に着て「人間不在」「道義不在」の説教の害毒を世間に垂れ流し、裏腹に自らの生き方だけは棚に上げ、安閑と生計を立てて地位も名声も安泰である。牛は牛づれの気楽軽薄、雲煙過眼の読者の無知、無頓着もまた度し難いと著者は長大息する。全集第二巻に収められた二葉亭四迷や中野重治や高村光太郎に関する論考に於いて、著者がかつて確実に日本に存在したひたむきさに就いて詳述し、呆れ返るほど洋学かぶれの偽物がのさばる以前の、感動的なまでに見事な和魂を称賛するのも当然である。とまれ、我が国の文人・学者のいい加減ぶりに愛想を尽かした松原氏は、ひたむきな真剣勝負の武人、（驚くべし、当時は世間から白眼視された）真摯なる自衛官と交際すべく、全国各地を飛び回る事になる。

たびたび松原氏と行動を共にした留守晴夫氏は、この全集第三巻の解説を、著者がかつて引用した森鷗外の以下の様な文章で結んだ。「要スルニ世間ハマダノンキナルガ如ク被存候。多少血ヲ流ス位ノ事ガアツテ始テマジメニナルカト被存候」。さて我が書評の読者は、この松原・留守両氏、鷗外の意見に与するか、それとも「マダノンキ」だから「多少血ヲ流ス位ノ事」に拒絶反応を示すか。世相の変化に関らず、感情的に賛成するにせよ反対するにせよ、何はさ

て置き、この文学的哲学的な異色の戦争論『松原正全集第三巻』をぜひ熟読玩味して頂きたい。西洋の鋭い批判精神と凄まじい破壊力の論理を、これほど真摯に活用できる著者の力業に是非とも驚嘆して頂きたい。「酸いも甘いも知らぬげに、いや酸い事ばかりは知らずして、すいすいと飛び」回る極楽とんぼの秋津島と、松原氏が苦々しげに評した三十五年前と、知的状況はほとんど変らないからである。

解説結語の「血ヲ流ス」事にこじつけて、ここで過日私が読了した松原正訳『宝島』(平凡社世界名作全集20、昭和三十五年）の作者 R. L. スティーヴンソンに就いて少し書いておきたい。児童文学『宝島』の中にも、訳者の好む様な正義感、道義的決断に関する興味深い場面があり、そこで主人公の少年は決死の覚悟をして海賊との約束を守りぬかんと努めるのだが、それはともかく、チェスタトンによれば、この冒険好きの少年の様な作者は「おれたちが血を流すことなどないのか！」と、ロマンスを否定するヴィクトリア朝の偽善と妥協の生き方に対して、猛然と抗議の声を上げたのである。事実、肺病病みのスティーヴンソンは恐ろしくひたむきで勇猛果敢な男であり、従容として斬首の刑に臨んだトマス・モアと酷似した最期を遂げた吉田松陰（YOSHIDA-TORAJIRO）に就いて、深い感動を籠めて下田踏海の挙を語り、「その生命と力と暇のすべてを捧げたため、彼の祖国が今日この大きな恩恵を得たことを忘れてはならない」と称賛した。

また別の折、ハワイのモロカイ島に於いてハンセン病患者のために一生を捧げたカトリックの神父ダミアンが自らも罹患して死去した後、スティーヴンソンと同じ会衆派の有力牧師ハイド氏が、故人の死因を女性患者との性交渉による梅毒感染だと喧伝し、この聖者の顕賞に水を差した事に対し、ダミアンの生前に面会を熱望したが体調優れず断念をしたスティーヴンソンは、真実を知るため病をおして現地を訪れ、「汚れた」隔離地域に一週間滞在して熱心に聞き取り調査を敢行、その結果ダミアン神父への謂れなき中傷だと判明するや激怒した彼は、名誉棄損の裁判に負ければ無一文になる事も覚悟して抗議文「ハイ

ド氏への公開状」を一気に書き上げ公表し、「ハイド氏を完膚なきまでに論難した」のである。これを要するに、スティーヴンソンもまた、社交や処世術を無視し損得を度外視しても、真実と正義を追求し、尊い何ものかを守るためには、文字通り生命を賭して真剣勝負を挑む知的に誠実な作家なのである。

時にジョンソン博士の様な、時にスティーヴンソンの様な、松原正氏の真剣勝負のひたむきさを知れば知る程、その日本人離れした知力、体力、精神力の合一に驚かされ、著者が英国文化の精髄をやすやすと自家薬籠中の物とされたかの様な錯覚を覚える。けれども、氏自身は全集第一巻「この世が舞台」の中で中島敦の「悟浄出世」を取り上げ、日本人が「西洋を理解する難しさを充分に意識」する事がいかに大切かを、自戒の念を籠めて強調した。「西洋の名著から得た教養は『附焼刃』なのではないか」、「いそっぷの話に出て来るお洒落鴉」、様々な西洋作家の羽を挿して飾り立てる「醜怪な鳥」。本物を気取る偽物は、死に学問の自己満足の、無くもがなの文章を書き散らし稼ぎまくるより他ないか。

だが、肝心なのは偽物の自覚だと著者は論断する。「洋魂を理解出来ぬ事を大層気に病んだ」国木田独歩の様に、西洋の学問・思想の凄まじい真理の渇仰も探求も、結句我々の生き方とはなじまないと、その事実を「常に忘れない」様にしなければならぬと説く。或いはまた、偽物の自覚は本物の存在を意識させ本物に近づく不断の努力を要求しうるから、偽善は善に通じる、とも論じられる。晩年に右旋回して日本へと先祖返りする英文学者の列には決して立たず、夏目漱石にこそ学び、学べども学べども解らぬ西洋精神であるとしても、終生格闘し続け「死して後已む」べし、との高級な次元に於ける学問観なのであり、いかな未熟者の私とて衝撃を受けた。カール・レーヴィットの警抜な比喩を借りれば、二階に洋風の書斎、一階にかりそめにも和風の居間のある、久しく普請中の恐ろしく往き来しづらい生家にあるのだが、痩せ我慢をして不自由を気に病みつつ我が家を大切にする、その様な気概ある一家の主の率直な言葉に直接ふれると、いくら鈍根な青二才でもさすがに感動した。この師こそ

「二本足の学者」であり、少しでも近づくために、高みを目指して一層精進しなければならぬ亀鑑であると痛感した。

けれども、感動した事にかけては、松原氏の紹介された濠北ビアク島で戦死した兵士の日記をやはり第一に挙げねばならない。全集第一巻の森鷗外「ぢいさんばあさん」の項や、『戦争は無くならない』の最終章「『無魂洋才』の国」の末尾に引用される日記の一節は、何度でも読み返したい雄々しい名文である。それは「自力でなさねばならず、また自力でなしうる事のみを、渾身の力を籠めてなし、南海の孤島に陣没した」陸軍中尉の見事としか評し様のない性根を端的に写し取り、読者に人間の幸福とは何かを沈思黙考せしめる。南洋のサモアで常住坐臥、死と直面しながら最期まで作品を書き続けたスティーヴンソンなら、この孤独な兵士の力強く健気な道義的行動の数々を、深い共感と敬意を籠めて一心に物語るに相違ない。無魂は論外だが、吉田松陰の場合の様に、和魂と洋魂との精華の間には、相互理解の可能な共通の徳目があるからである。

今後も圭書房から出る予定の『松原正全集』を広く江湖に推し、特に少壮気鋭の学者や研究を志す若い人々に読んでほしい理由は、約言すれば以下の通りである。読めば必ず知的な衝撃を受けて、以前の自分とは別の新たな自分になる筈だからである。「論語読みの論語知らず」なる俚諺がある。理屈は立派だが、口先だけで実行力の無い道学先生の事を意味する。しかし、さらに醜悪滑稽な、英語読みの英語・論語知らずなる偽物が多く存在する。西洋の学問知識はたんとあるが単に西洋文化にかぶれただけで、日本の文化には皆目関心が無く、父祖の徳義にもとる行動しかできぬ様では、元も子も無いのである。なるほど西洋の精神に学ぶ努力は地道に継続しなければならない。しかし、学ぶとは真似ぶ事であり、真似ようとして遂に真似られぬ西洋精神の苛烈を悟らねば意味が無い。のみならず、西洋と過去の日本とを直視して内省し、現在の日本に於ける等身大の自己との、双方向への隔たりを正確に測定する難事に挑まねばならない。つまり、彼我の文化の差ばかりでなく、日本の古往今来に存する

和魂と無魂との埋め難い溝も、その途方もなく大きな精神的距離も、常に意識しておく事が大事なのだと、これは松原氏が口を酸ぱくして語られた苦い真実である。だが、英語の勉強の延長ついでに英文学を研究し、いくら二階で西洋学問に淫した所で、この苦い真実だけは得心はおろか想到する事すらできず、かくて博覧強記のスタイナーが一刀両断に斬り捨てた「荒涼たる灰色の沼地以外のなにものでもない」研究・論文が一丁上がり、陸続と仕上がる底無しの凋落へとつき進むしかないのである。

長らく地に足のつかぬ遅鈍な門人は「利いた風な事を書くな」、「いい気になるなよ」、「君はロレンスの（チェスタトンの）身内か」等々、幾度となく恩師から叱正を受けた。そして、全集の評言からも明々白々な如く巧妙かつ効果的なこと無類の、卑近な具体的事例を一々挙げられ、深刻めかした拙論の滑稽な誤りと上滑りを懇切丁寧に説明して頂いた。単刀直入に白状すれば、ボズウェルよろしく居た堪れないほど木端微塵に粉砕された。無論、師匠の講評を完全に理解できた訳ではない。だが、「山月記」の李徴ではないが、「臆病な自尊心」と知的な虚栄心とを肥大させた自業自得の私の様に、学者の抽象論や専門用語のでたらめに騙されないために、自らが言行不一致の厚かましい偽物とならないために、格物致知の真の学者たる松原正氏の著作こそは必読書の随一と確信し、ここに推奨して世の操觚者ならびに愛書家に、購読の喜悦に倍加する感奮興起を約束する次第である。

そして出来れば、アインシュタインとフロイトの往復書簡『ひとはなぜ戦争をするのか』(講談社学術文庫、平成二十八年）と併読して頂きたい。松原氏の思考の徹底と迫力とには較ぶべくもないけれども、両天才の文章にはいくつか的確な知見も認められるのだが、他方、解説を書いた解剖学者の養老孟司と精神科医の斎藤環との評言は余りに太平楽過ぎる。これぞ「人間不在」、「道義不在」の戦争論の典型である。詳述はしないが、解説者の二人には、自分がアインシュタインの批判した「暗示にかかりやすい」知識人、つまり「現実を、生の現実を、自分の目と耳で」把握せず、「紙の上の文字、それを頼りに複雑

に練り上げられた現実を安直に」理解しようとする知識人の一人である自覚が全く無く、フロイトの評した「穏やかな生活を送る種族、強制や攻撃などとは縁のない種族」、即ち「私には信じられない」人間の一人であるとの痛感も皆無なのである。八十五年前の西洋の科学者の方が人間に就いて遥かに深い洞察を示した事実は、科学の進歩が人間を必ずしも賢明にせぬ事を、無魂洋才の悲惨を改めて露呈し、浅薄な文化観を得意気に開陳する現在の日本人科学者の存在は、養老孟司の結びの通人ぶりを皮肉るなら、性懲りも無く「ヒトは変らず、社会も変らぬ」との仮想ならぬ厳しい現実を、腹立たしくも明証するものに他ならないのである。